

2020年11月6日

報道関係各位

中部学院大学

「認知症との出会い」体験記・エッセイ受賞者決まる

中部学院大学（学長 古田 善伯）人間福祉学部（学部長 飯尾良英）は高校生を対象に、「認知症との出会い」をテーマにした体験記やエッセイを募集してきました。この度、優秀作品など12名の受賞者が決まりましたので、お知らせします。

今回の体験記・エッセイの募集は今年度初めての試み。日本は超高齢社会を迎え、認知症を発症する高齢者が増えてきている中で、身近である家族や地域の方が認知症となり、接する機会も増えています。今回のねらいは、高校生から寄せられた「生の声」を通して、認知症についてより理解を深める契機にすることです。11月11日の「介護の日」に合わせ、認知症の啓発につなげていきます。

受賞者は下記の通り。表彰者には表彰および賞品を贈呈するほか、本学ホームページで作品を紹介する予定。なお、受賞者への個別の取材は事前に大学へお問い合わせください。

記

- 募集内容 家庭での体験、通学途中のこと、地域で出会ったことなど、認知症の方と出会った経験やエピソードを投稿
- 募集要件 100～400字程度
- 応募期間 2020年6月22日（月）～8月31日（月）
- 応募総数 74編（岐阜県内をはじめ、東京、福岡など全国から応募あり）
- 受賞者 最優秀賞3編 / 優秀賞5編 / 佳作4編

		氏名	学校名	学年	摘要
1	最優秀賞	田中 心和美	福岡女学院高等学校	2年生	福岡県
2	最優秀賞	佐々木 愛莉	岐阜県立大垣桜高等学校	3年生	岐阜県
3	最優秀賞	吉田 弥生		2年生	東京都
4	優秀賞	匡 名	岐阜県立大垣桜高等学校	3年生	岐阜県
5	優秀賞	坂井 日花留	岐阜県立各務野高等学校	3年生	岐阜県
6	優秀賞	岸野 恵理加	広尾学園高等学校	2年生	東京都
7	優秀賞	米澤 京香	岐阜県立各務野高等学校	3年生	岐阜県
8	優秀賞	仲河 麻衣	岐阜県立各務野高等学校	3年生	岐阜県
9	佳作	渡邊 つゆめ	岐阜県立大垣桜高等学校	3年生	岐阜県
10	佳作	渡邊 優羽	岐阜県立大垣桜高等学校	3年生	岐阜県
11	佳作	高橋 那奈美	岐阜県立大垣桜高等学校	3年生	岐阜県
12	佳作	野々村 彩夏	岐阜県立大垣桜高等学校	3年生	岐阜県

以上

（本件に関するお問い合わせ先）

中部学院大学 人間福祉学部（担当：名倉） TEL:0575-24-2211

■福岡女学院高等学校(福岡県)2年 田中 心和美(たなか・こなみ)さん

私の祖父は認知症です。祖父は全部忘れてしまいました。

ずっと繰り返し聞かされた戦後戦時中の話。自慢げにしていた大学のヨット部の話。一緒にお風呂に入った時に歌っていた上杉謙信の歌。そして可愛がってくれた孫の私。

全て、全て忘れてしまいました。もう二度と戦争の話もヨットの話もしません。歌も歌いません。私が訪ねても「よく来たね」と笑ってくれません。

認知症になって陽気だった性格や顔つきも変わりました。まるで怖い顔をした祖父そっくりの着ぐるみが祖父を乗っ取ってしまったかのようです。何度訪ねて、何度会っても、祖父と私は「はじめまして」を繰り返します。認知症は祖父を奪って行きました。私たちに何処にも捨てられない感情をもたらしました。

しかし、認知症になってまともに話せなくなってからこそ、祖父との過去の話などを大切に思えました。幼い頃に聞いた祖父の話は私の記憶となり、祖父の代わりに私がずっと覚えていきます。いずれ、私が祖父と同じようになってしまっても覚えていきたいです。

祖父は認知症です。しかし、私が祖父の代わりに全部覚えていきます。また「はじめまして」を言い会いに行くので、待っててね。

■岐阜県立大垣桜高等学校3年 佐々木 愛莉 (ささき・あいり)さん

私と祖母は、今でも同じ布団で寝たり、休日の朝は一緒に喫茶店へ行くほど仲が良い。昔から、私が落ち込んでいると必ず1番に気付いて相談に乗ってくれる。親にでさえ言えないことも祖母になら何でも話せる。祖母は私の1番の味方だ。

最近の祖母は物忘れが酷い。車のドアを開けたままにしたり、鍵をよく無くす。私が年を重ねるように祖母も年を取っていく。認知症の学習をしている私にとって嫌な予感がしつつある。私の名前も最近は呼ばなくなった。すぐに出てこないのか、「ねえ」と肩を軽く叩いて私を呼ぶ。「愛ちゃん」と優しく呼んでくれる祖母が大好きだったので急に悲しくなった。

もし、この先祖母が認知症になって私のことを忘れてしまったとしても、今まで2人でしてきたことをたくさん話そうと思う。祖母が私に優しくしてくれたように、今度は私が祖母の1番の味方でありたい。

■高校2年（東京都） 吉田 弥生（よしだ・やよい）さん

私がまだ小学生だったころ、祖母はとても活動的な人でした。習い事や友人とのお出かけ、家族旅行、毎日忙しくて仕方ない、という笑顔の素敵な祖母でした。唯一の孫である私は、記憶のある限り全てにおいて祖母から溺愛を受けていました。

その祖母に異変が見られたのは、高校に入学した頃でした。賢い祖母です、自分で自分の異変に気が付いたのでしょう。記憶があるうちにと、私に「ばあばは、あなたのことが一番大切だからね」と母の名を呼び語りかけてきました。名前を呼び間違えられたその瞬間、表現できない寂しさと、いつか祖母の脳裏から私たち家族との記憶がなくなるという覚悟が生まれました。記憶にとどめられるよう写真を撮ったり、贈り物をしたり。祖母の脳裏から消えていく記憶の量を補うように新しい思い出を作ること懸命でした。でもきっとすべて忘れてしまうでしょう。でも祖母がすべてを忘れても、私は祖母を忘れません。愛された記憶も暖かい手も。おばあちゃん、大丈夫だからね。ありがとう。